

- 19) R. O. RITCHIE, J. F. KNOTT, and J. R. RICE: J. Mech. Phys. Solids, 21 (1973), p. 395
- 20) G. A. CLARKE, J. D. LANDES, and J. A. BEGLEY: J. Testing and Evaluation, 8 (1980), p. 221
- 21) A. J. CARLSSON, and K. M. MARKSTRÖM: in Fracture 1977-Advances in Research on the Strength and Fracture of Materials, Vol. 1, ed. by D. M. R. TALPIN (1977), p. 683 [Pergamon Press, New York]

## コ ラ ム

### 技 術 の 伝 承

バーナーの青い炎の中で透明なガラスが赤くそまり、のぼされたりつながれたりしながら複雑な形に変えられていく。注文者のこのみによるのであろうか、怪物の頭のように何本もの角を出し、口を開いたガラス器が実に巧妙にでき上つていく様子はいつ見てもあきない。現在でも、昔の職人かたぎを彷彿させる腕にプライドをもつたおやじさんの仕事場が私共の研究所の一隅に存続している。最新のコンピュータつき分析装置と並んでこうしてでき上つた手造りのガラス器が実験の重要な部分を支えているのである。このような技能はまさに人から人へ身体で覚えて伝えられていくべきもので、伝承のためには常に人を絶やさず次代を育成しておくという配慮が必要である。

一時代前までは製鉄所の操業現場には、神様が大量にいた。現在は多くの測定装置、解析機器が製造設備の中に入り込んで、個人の勘とか技倆に頼る部分は非常に少なくなっている。神様を必要とした時代には、人から人への伝承が重要であつたが、現在では、多くの場合技術の伝承は個人ではなく組織として管理された

形式で標準類、基準類等の中で行われるようになっていく。

ひるがえつて研究分野はどうであろうか。どのように実験装置が機械化され、コンピュータ化されても、研究行為には必ず個性が出るべきである。しかし個性を出す、物まねではないということは先人の足跡を学んだ上でできることであり、逆に後人のために残し伝えるべき義務があるということでもある。伝承手段は伝えるべき対象レベルにより企業内、学内におけるレポートの類から講演発表論文発表までいろいろある。執筆の際一般にはあまり強く意識されないことではあるが論文には技術伝承という側面もあるということ、そして、人から人へと伝えられる技能、標準基準としてフェイルされ引きつがれていく技術、論文という形式で共通の場で伝達され蓄積されていく技術などのような形式であれ技術は伝承されるべきであり、また伝承することに気を配るべきであろう。このような観点からもすぐれた論文が数多く投稿され「鉄と鋼」がますます充実することを期待したい。

(日本鋼管(株)技術研究所 原 富啓)